二、東海寺の七不思議

　北品川にある東海寺は、寛永十五年（一六三八）に江戸幕府の三代将軍徳川家光によって建てられた臨済宗の寺で、最初の住職となったのは沢庵宗彭です。
　沢庵和尚は、大変立派な僧侶で、後水尾天皇や将軍家光の尊敬をうけていたため、東海寺もまた特別の保護を受け、境内は、四七，〇〇〇坪（約十五ヘクタール）もあり境内にはたくさんの塔中（小寺院）がありました。現在の東海寺は、明治時代になって、塔頭の一つだった玄性院が寺の名を引き継いだものです。
　この東海寺には、七つの不思議な話しが伝わっています。
１．    片身の鱸
　東海寺の大山墓地の近くにある権現山は、もとは東海寺の庭だったところで、そこには大きな池があったそうです。この池の主は、珍しいことに片身の鱸でした。ある日のこと沢庵和尚が、寺に帰ると、台所で僧たちが、大きな鱸をまな板にのせて、片身を切り取ったところでした。和尚が、片身になった鱸に「喝」と一声発して、池に投げ込むと、鱸はたちまち元気に泳ぎだし、池の奥深く消えて行き、いつしか池の主となって、東海寺を守ったとのことです。
２．    鳴かないカエル
　東海寺の大池には、カエルがたくさん住んでいましたが、一度も鳴いたことがないそうです。これは、ある時、沢庵和尚が、読みものをしている時に、あまりにもやかましく鳴くので、「やかましい、鳴くな。」と叱りつけたからで、それ以来カエルは鳴かなくなったそうです。
３．    片なりのイチョウ
　境内にあるイチョウは、なぜか片方にばかり実がなるそうです。
４．    潮見の石
　東海寺には、古くから大きな石の水鉢があり、塩の満干を示して、満潮時には水が一杯にあふれ、干潮時には涸れてしまうそうです。このことから、「潮見の水鉢」と呼ばれていました。水鉢の下には、昔一体の石地蔵が埋まっていましたが、その後掘り起こされて、この地蔵は、潮見地蔵と呼ばれ、境内の祠に祀られ、水鉢も、地蔵堂の中に安置されたそうです。
５．    血のでる松
　東海寺の山門のそばに一本の大きな松の木がありました。将軍が、東海寺に参詣する時にじゃまになるので「じゃまの松」と呼ばれていたそうです。ある時この松をとうとう切り倒すことになりました。
ところが、木こりが、のこぎりを引き出すと、その切り口から赤い血がにじみだし、手がしびれてしまいました。そこで寺では、霊木として残すことにしましたが、切り口はずっと赤い口を開いたままでした。
６．    火消しの槇
　東海寺の裏庭には、唐（中国）から持ちかえって植えられたという柏槇の木がありました。ある日のこと、真夜中に沢庵和尚が、「唐の金山寺が火事だ、起きろ、起きろ。」と寺の僧を呼び起こして、その柏槇の木に水をかけさせました。僧たちは、大変驚きましたが、しばらくして、金山寺から、「おかげで火が消えました。」といって、お礼の品物がお贈られてきたということです。
７．    千畳づりの蚊帳
　唐の金山寺からのお礼として、桐の箱に収められた蚊帳が届き、寺の宝物になりました。千畳づりという蚊帳の大きさは、見当もつきませんが、当時としては、日本一の大きな蚊帳だったことでしょう。

参考サイト

品川区ホームページ

東海道品川宿のはなし　第5回

<https://www.city.shinagawa.tokyo.jp/PC/sangyo/sangyo-bunkazai/sangyo-bunkazai-rekisisanpo/sangyo-bunkazai-rekisisanpo-sinagawasyuku/hpg000006564.html>